

第1学年 社会科学学習指導案（歴史的分野）

日 時：平成28年7月7日（木） 6校時

場 所：1年A組教室

学 級：1年A組（男子19名 女子13名 計32名）

1 単元名 原始・古代の日本と世界 「大帝国の出現と律令国家の形成」

2 単元について

(1) 教材観

本単元は、学習指導要領〔歴史的分野〕の内容(2)「古代までの日本」の中項目イにあたり、聖徳太子の政治、大化の改新から律令国家の確立に至るまでの過程を、小学校での学習内容を活用して大きくとらえさせる中で、大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ、その後、天皇や貴族の政治が展開したことを理解させることをねらいとしている。

7～8世紀の世界は、東西に大帝国が成立し、シルクロードを通じた国際交流が盛んになってきた時代である。日本に目を向けると、この時代は、主に聖徳太子、中大兄皇子、天武天皇が活躍した3つの時代に分けることができる。聖徳太子の時代は比較的平和な時代、続く中大兄皇子の時代は、聖徳太子の代わりに蘇我入鹿が政治の実権を握っていた不安定な時代。中大兄皇子が蘇我入鹿を滅ぼした後も、白村江の戦いで唐と新羅に敗北するなど不安定な時代が続く。最後の天武天皇の時代は、飛鳥時代から奈良時代に向けて世の中の仕組みが大きく変わる時代である。そのような中で、対外的には大陸の文物や制度を取り入れながら、国家の仕組みが整えられてきた時代である。

このことから、大陸の制度を取り入れながら国家の仕組みが整っていく過程で、その後の時代まで続く中央集権体制が確立していったことに気付かせたい。「飛鳥」時代だけではなく、政治の制度から、その後の「奈良」・「平安」の時代に見通しを持てるようにしていきたい。

(2) 生徒観

生徒たちは前単元の「日本の成り立ちと倭の王権」において、政治の様子・外国との関係・社会の様子などの視点から、資料をもとに追究する学習活動を行ってきた。そのなかで、事象相互が関連し合っただけで絶えず変化していることについて資料をもとに分析したり、思考・判断したことを論述したりする活動に取り組んできた。しかし、複数の資料を関連づけて共通点などを見つけることや、具体的根拠を明示して客観的に思考・判断および表現する活動については意欲を欠く生徒も見られる。

また、歴史の学習を始める前に行ったレディネステストの結果を観点別に見ると、「社会的な思考・判断・表現」と「社会的な事象への知識・理解」の正答率が「資料活用の技能」と比較して、低いことが分かる。資料から必要な情報を取り出す力のみならず、基本的な用語の定着、そして、読み取った事柄を比較・関連・総合し、自分の言葉で伝える力をつけることが課題となっている。

そこで本単元の指導にあたっては、資料の提示方法を工夫することによって学習意欲を高めていくとともに、複数の資料の読解を中心とする言語活動を一層充実させることで、資料活用の技能および思考・判断の力を高め、表現力を磨いていくことに留意したい。

レディネステストの結果（平成28年6月）

観点	正答率
社会的な思考・判断・表現	62.7%
資料活用の技能	89.7%
社会的な事象への知識・理解	69.7%
全体	69.4%

(3) 指導観

上記の実態をふまえ、本単元の指導にあたっては、社会的事象を多面的・多角的にとらえさせるために、複数の社会的事象を基にして論理的に考えさせる活動が必要である。具体的には、複数の資料から必要な情報を関連付けながら読解する活動や、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことにより、お互いの考えを深めていく学習の充実を図る。

また、効果的な話し合い活動をさせるための指導の手だてとして、グループによる討議活動の際には、あらかじめ司会者やまとめ役を決めておいたり、グループごとにホワイトボードを利用したりして、活動を展開させる。これをもとに、学級全体で発表活動を行い、多くの人の意見を共有する機会を設定することで、自分の考えを深め、社会的事象をより多面的・多角的に考察するようにさせたい。また、討議活動を通して合意形成していく学習活動を積み重ねることにより、自ら社会にかかわろうとする意識を高めていきたい。

3 単元の目標と評価基準

(1) 単元の目標

- ・大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら、日本の国家の仕組みが整えられたことを理解することができる。

(2) 単元の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象への知識・理解
7～8世紀の世界の動きや、日本と大陸との交流に対する関心を高め、律令国家が確立していく過程について意欲的に追求している。	聖徳太子の政治や飛鳥文化の特色、大会の改新と律令国家の確立について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	7～8世紀の世界の動き、聖徳太子の政治や飛鳥文化の特色、律令国家の確立に関する様々な資料を活用し、読み取ったりまとめたりしている。	世界の東西に大帝国が成立し、国際交流が盛んになったころ、日本では大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家のしくみが整えられたことを理解している。

4 単元の指導計画（総時数3時間）

- (1) 広がる国際交流・・・・・・・・・・1時間
- (2) あつく三宝を敬え・・・・・・・・・・1時間（本時）
- (3) 律令国家への歩み・・・・・・・・・・1時間

5 本時の指導

(1) 目標と具体的評価

目標	おおむね達成	未達成の場合の支援
聖徳太子が、中国や朝鮮の国々にならった新しい政治を進めた理由について説明している。 【思考・判断・表現】	聖徳太子が進めた新しい政治について、複数の資料を関連付けて調べ、自分の考えを述べている。	資料の活用について教師が支援し、自分なりの言葉でまとめられるように助言する。

(2) 指導の構想

別紙 授業構想シート参照

(3) 展開

段階	学習内容	学習活動	教師の指導・支援 ○評価【観点】●UD 視点
導入 10分	(2分前学習 前時までの学習内容の確認) 1 課題提示 2 学習課題の把握	(・大帝国に発展した当時の中国や、朝鮮半島を統一した新羅から進んだ制度が日本に伝えられたことをとらえさせる。) ・聖徳太子が進めた政治について、小学校での既習事項を確認するとともに、隋の政治制度と比較させながら、学習課題につなげていく。	(●スパイラル化 ・ペアで説明し合う) ●視覚化 ・資料をテレビに提示する
聖徳太子は、なぜ中国にならった政治改革を行ったのだろうか			
展開 30分	3 予想 (学習課題の焦点化) 4 追求活動 (個人→5人班グループ) 5 交流活動 (全体) 6 検証する 7 深める	・学習課題について、個人でその理由を予想させる。 →隋の方が進んだ国だった →天皇中心の国づくりを進めたかった →今までの政治は適当だった 学習プリント ①隋の政治制度 (導入で提示済み) ②隋と隣国との力関係 (朝貢) ③魏に送った手紙 ・読み取った事実について、根拠を示しながら発表させる。 ・追究で使用した資料を関連させ、 <u>①隋の進んだ政治制度を取り入れたかったということ</u> 、 <u>②主従関係ではなく対等に隋と付き合い合ったかったということ</u> を確認する。 「なぜ、聖徳太子は改革を推し進めたのだろうか」 ・当時の隋の皇帝に「日本は未開の野蛮な国だと思われていた」ことを押さえ、検証に深みを持たせる。	○資料を関連づけて読み取ることで、「当時の隋の政治制度が他国より進んでいた」ということと、「隋の隣国は主従関係だったが、日本は対等に隋と付き合い合ったかった」ということが表現できる。【思考・判断・表現】 ●共有化 ・ホワイトボードを使用し、①～③の資料をグループで関連付ける。
終末 10分	8 振り返り	・本時の学習内容について「わかったこと」と「追究して考えたこと」を自分の言葉でまとめる。 <div data-bbox="264 1675 1433 1944" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>わかったこと：おおむね達成のまとめの例：聖徳太子は、(文明国として) 中国と対等に付き合いながら、中国の進んだ政治制度を取り入れた国づくりをしようとしたからである。そのために、冠位十二階や十七条の憲法を制定したりして、近代的な国づくりを進めていった。 考えたこと：当時の進んだ国である隋からただ学ぶだけではなく、対等な国づくりを進めるために改革を推し進めたというのがすごいと思った。私も、ただ人の考えを真似するだけではなく、自分でできることも考えながら生活をしていきたい。</p> </div>	●視覚化 まとめに使う言葉に黄色チョークでアンダーラインをひく ●共有化・構造化
		・意図的な指名により本時のまとめを共有する	●共有化・構造化

(4) 板書計画

学習課題 聖徳太子は、なぜ中国にならった政治改革を行ったのだろう

確認する

予想 ○○○だから
○○○だから

1班	2班	3班
4班	5班	6班

調べる

資料1

資料2

資料3